

“才”と“了”はなぜ共起できないのか？

鈴木 進一

1. はじめに

中国語の副詞“才”が表わす意味の中には、動作や事態の発生が、予想していたより「遅い」或いは「順調でない」ことを表わす場合がある。この意味で使われた“才”を日本語に訳すときには、「やっと」とか「ようやく」と訳されることが多い。

さて、この「やっと、ようやく」の“才”について、中国語の文法書や日本人が表現する中国語の誤用分析を扱った書籍などでは、副詞の“才”と助詞の“了”は一緒に使ってはいけない、つまり“才”と“了”は共起できないと記されているのをしばしば目にする。実際、次のような例文や解説がある。

- (1) 那篇文章，他半个小时才念完。

(その文章を、彼は30分間でやっと読み終えた。奥水・島田2009 p. 294)

- (2) 他三十岁才上大学。

(彼は30才でやっと大学に上がった。郭2009 p. 184)

例文(1)は、30分間という時間を長い時間であると考え、読み終わるのが「遅い」という意味を“才”が表わしている。解説では、「“才”を用いた場合は文末助詞“了”を加えないでよい。×“才念完了”は誤り。」(p. 294)、と“才”と“了”が共起しないことを注意している。一方、例文(2)は、一般的には20才位で大学に

入学するのを、30才で入ったのだから時間がかかって「遅い」という意味や、入学までが「順調でない」という意味を“才”が表わしている。解説では、同じく中国語の副詞に分類される“就”と比較して、次のように解説している。「確かに、“就”はいつも“了”と一緒に使います。しかし、“才”には“了”が使えないのです。」(p. 184)、とやはり“才”と“了”が共起しないことを断っている。

このようにわざわざ共起しないことを断るということは、裏を返せば、日本人が中国語を使うとき“才”と“了”を共起させてしまいがちだ、ということを物語っていると言える。

2. なぜ“才”と“了”を共起させてしまうのか

では、いったいなぜ副詞の“才”と助詞の“了”を共起させてしまうのだろうか。

文法書における助詞“了”の解説では、文中で置かれる位置の違いにより、一般に「時態助詞」(「アスペクト助詞」)と「語気助詞」に分類される。時態助詞の“了”は、動詞の直後または動詞+(結果や方向)補語の直後に置かれ、“了₁”と区別して記されることもある。一方、語気助詞の“了”の方は文末に置かれ、しばしば“了₂”と区別して記されることもある。

これら2つの“了”の機能については、時態助詞の場合は、動作や行為の完了を表わすとする「完了説」や実現を表わすとする「実現説」、

更に両説を合わせた「完了・実現説」もある。ここではとりあえず完了説の立場をとっておくことにする。一方、語気助詞“了”の機能については、状況の「変化」または新しい事態の「発生」を表わすとする「変化・発生説」が多い。更に、動詞の直後でしかも文末に置かれた場合は、どちらの機能であるか区別できず、どちらの機能も持っていると考えられている。

このようなことを踏まえて、もう1度上の例文を見てみよう。(1)でうっかり“了”を文末に付けてしまうのは、「読み終えた」ということ(おまけに結果補語の“完”まで付いていること)から、読むという動作が完了したと考え、“了”が必要であると思ってしまうのであろう。一方(2)では、「やっと大学に上がった」ということから、大学に上がっていなかった状態から、大学に合格した状態に変化したとか、また、大学に上がったという新しい事態が発生したと考えたりして、“了”を付けてしまうのだと思われる。“了”を付けてしまうのは、中国語を母語としない話者にとっては自然な発想だと思われる。“了”の文法解説に忠実に従うならば、逆に“了”を付けない方に違和感を覚える。

3. “了”のモダリティ

ここで文末に置かれた“了”、つまり語気助詞の“了”に限定して、それがもつ語気、言い換えるなら、「モダリティ」について考えてみる。モダリティとは、「発話時における話し手の心的態度」と定義しておくことにする。

従来、助詞“了”についての研究は、時態助詞(「アスペクト助詞」)の“了”に関する研究が主流であった。語気助詞の“了”についての研究、すなわち“了”のモダリティに関する研究は、アスペクトに関する研究に比べると、比較にならないくらい発表された研究は少ないといえる。そのような状況の中で、劉綺紋(2006)では、“了”のモダリティに関して詳細な研究

を行っている。その第5章では次のような例文を挙げて解説している。括弧内の訳は、すべて劉の訳に基づく。

- (3) a. 我吃了一个。
(私が一個食べた)
b. 我吃了一个了。
(もう私は一個食べた〈もう充分食べた〉)
- (4) a. 我听你讲过一次。
(あなたが言うのを私が一回聞いた〈ことがある〉)
b. 我听你讲过一次了。
(私はもう、一回聞いた〈もう充分聞いた〉) (p. 131)

(3)や(4)において、文末に語気助詞の“了”が付いていないaは、出来事を「ニュートラルに述べている」(p. 131)のに対して、文末に語気助詞の“了”を付けたbの方は、「“已经”(もう)のような表現が用いられていないにもかかわらず、…(途中省略)…「もう」や「充分」などのニュアンスを伴っている」(p. 131-p. 132)、と記している。劉はこのようなニュアンスを伴う語気助詞の“了”を、「〈充足感〉の“了”」と呼んでいる。

更に(3)や(4)で、時態助詞の“了”や“过”を取り除いて、語気助詞の“了”だけが付いている次のような例文については、

- (5) 我吃一个了。
(もう私は一個も食べた)
- (6) 我听你讲一次了。
(あなたが言うのを、もう私は一回聞いた)
(p. 136)

文末にある語気助詞の“了”が「アスペクト機能とモダリティ機能を併せ持つことになる」(p. 136)としている。それでアスペクト機能の面からみると、(5)ではまだ食べていない状態からすでに1個食べたことを表わし、(6)で

は1回も聞いていない状態から、すでに1回聞いたことを表わしている。またモダリティ機能の面からみると、(5) はもう1個たべて充分だ、(6) はもう1回聞いて充分だという気持ち、つまり〈充足感〉を表している。(3) のb, (4) のb, (5), (6) のいずれの場合も、文末に語気助詞の“了”が付くことによって、話し手のモダリティとしての〈充足感〉を表しているということになる。

4. “才”と数量の関係

本稿のはじめに、副詞“才”には事態の発生が予想よりも時間的に「遅い」或いは「順調でない」という意味を表わす場合があると記したが、更に“才”には数量的に予想より「多い」という意味を表わす場合がある。実際次のような例文がある。訳はすべて筆者による。

- (7) 这本书他三天才读完。(岳2000 p. 21)
(この本を彼は3日間でやっと読み終えた)
- (8) 这道题他看了两遍才看懂。(岳2000 p. 21)
(この問題を彼は2度読んでやっとわかった)

ただし、これには1つ注意すべきことがある。数量が多いことを表わすのは、数量を表わす語句が“才”の前方にある場合であり、もし数量を表わす語句が“才”の後方にある場合は、逆に数量が「少ない」ことを表わす。

- (9) 老王参加工作才十七岁。(岳2000 p. 20)
(王さんが仕事に参加したのはわずか17歳のときであった)
- (10) 小王身高才一米七。(岳2000 p. 20)
(王君は身長がたった170cmである)

さて例文(7)、(8)に戻って見てみると、話し手が予想したよりも日数や回数が多いことを“才”が表わしている。しかしそれ以上に、読

後の満足感や理解度の充分性まで表わしているかといえば、それは不明である。“才”を使って、ただ単に、話し手の予想した日数や回数を超過して、読むことや理解することができた事実を述べているとも考えられる。もし事実だけを表わすのであればこれで充分である。文としては、“了”なしで完結できるのである。

5. 共起できない理由と更なる問題点

以上のように、文末の語気助詞“了”は〈充足感〉のモダリティをもち、一方、副詞“才”は話し手の予想を超過していることを表わしていることがわかった。超過の事実を示すだけで〈充足感〉までは表わさないならば、別に“了”を使う必要性はない。これが“才”と“了”が共起しないことの1つの理由であると考えられる。しかしこれは決して共起できないことを意味しているわけではない。実際次の例文では“才”と“了”が共起している。

- (11) 老师讲了三遍，我才明白了。(郭p. 183)
(先生が3回説明して、私はやっとわかった)

郭は、この例文について「「もともとわからなかった段階からわかるようになった」ということを表わすなら、“了”が必要なのです。」(郭p. 184)と説明している。“了”は文末にあるので、当然語気助詞としての機能により、わからなかった状態からわかった状態に変化したことを表わすと考えられる。その上劉の考え方から説明を付け加えると、語気助詞“了”のモダリティから、十分にわかったという〈充足感〉のモダリティも表わしているとも考えることも可能である。

更に郭は、「動作が実現する前に何かを繰り返すなどという前提があれば、“才”は“了”と一緒に使えます。」(郭p. 185)とも説明している。しかしこの説明に対しては、次のような

反例もある。

(12) 催了几次, 他才走。

(なんども催促して, 彼はやっと出かけた
『中日辞典』“才”の部)

催促を繰り返すという前提もあり, 出かけていない状態から出かけた状態に変化したという条件も満たしているのに, “才”と“了”は共起していない。(11)と(12)の違いについては, 次のように説明できる。(11)は文末に“了”が付くことで, 分からない状態からわかった状態に変化したことと, しかも充分に分かったという〈充足感〉のモダリティが表わされている。それに対して(12)は, 文末に“了”がなく, 単に出かけた事実を表現したに過ぎず, 変化もモダリティも関係ないのである。

以上で“才”と“了”の共起に関する問題は解決できたようにも思われるが, 考察の過程で更に問題が発生してくる。例えば, 本稿では語気助詞の“了”と“才”が共起しにくい場合を扱ったが, 時態助詞の“了”と“才”の共起の場合はどうであろうか。河野(2002)では, 時態助詞と“才”も共起しにくいことを, 小説中の用例実数を出して示している。(p. 203)ところが下の(13)は, 共起している場合の例文である。

(13) 这是您说的? 您这才说了良心话!

(これがあなたの言葉, あなたは今やっと
まともなことを言ったね『現代中国語辞典』“才”の部)

動詞の直後で文末にない時態助詞との共起については, モダリティではなくアスペクトであるから, ここで“了”が表わすのは完了であり変化ではないし, 更に劉のいう〈充足感〉は使えない。これをどう説明したらいいのであろうか。

また副詞“就”は, 次の例文のように“了”

と共起される。例文の訳は筆者による。

(14) 这本书他三天就读完了。(岳2000 p. 21)

(この本を彼は3日でもう読み終えた)

“才”と“了”が共起されにくいのに対して, “就”と“了”では共起されることも, 両者を比較して説明する必要があるであろう。

“才”と“了”の共起に関しては, 上に挙げた2つの問題以外にも, まだまだ解決されなければならない未解決の問題が残されていると思われる。今後たくさんの用例を収集・分析し, 包括的な説明を追究していきたいと考える。

例文出典

『中日辞典』2001 小学館

『現代中国語辞典』2001 光生館

『中国語 わかる文法』2009 興水優・島田亜実
大修館書店

『誤用から学ぶ中国語—基礎から応用まで—』
2009 郭春貴 白帝社

『やさしく くわしい 中国語文法の基礎』
1995 守屋宏則 東方書店

参考文献

劉綺紋 2006 『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会

岳中奇 2000 「“才”、“就”句中“了”的对立分布与体意义的表述」『语文研究』第三期 pp. 19-27

河野直恵 2002 「“才”と“了”の共起関係について」『中国語学』249 pp. 196-210 日本中国語学会